

接続料と利用者料金との関係について

1 経緯

- 一般に、市場メカニズムが有効に機能している場合、小売料金はコストに適正利潤を加えたものになることから、接続料の妥当性を検証するため、平成11年から、接続料と利用者料金の関係に関する検証(以下「スタックテスト」という。)を行っている。
- NGNでアンバンドルする機能(收容局接続機能、IGS接続機能、中継局接続機能、イーサネット接続機能)については、平成20年3月付情報通信審議会答申「次世代ネットワークに係る接続ルールの在り方について」及び同答申を受けて接続料算定に係る具体的問題を検討した「次世代ネットワークの接続料算定等に関する研究会」報告書(平成20年12月)において、新規に接続料が設定される機能であることや将来原価方式で算定されること等から、接続料の妥当性を多角的に検証する必要性がより高いため、「フレッツ光ネクスト」、「ひかり電話」、「ビジネスイーサワイド」の3区分を新たに追加してスタックテストを実施することが適当とされた。
- これらを踏まえ、今回のスタックテストを行うものであるが、現時点ではイーサネット接続機能の接続料が設定されていないこと及びNGNに係る接続会計のデータが整理されていないことから、
 - ①スタックテストの対象サービスとしては、平成21年度接続料を設定する機能に係る「フレッツ光ネクスト」・「ひかり電話」の2区分とするとともに、
 - ②その実施に接続会計のデータが不要である「総務省が実施するスタックテスト」のみを実施することとする。(接続会計のデータが必要な「NTT東西が実施するスタックテスト」は、「フレッツ光ネクスト」と「ひかり電話」については、平成21年度接続会計の公表時、「ビジネスイーサワイド」については、平成22年度接続会計の公表時から開始することとする。)
- なお、接続料と利用者料金との関係が必ずしも固定的なものではないため、スタックテスト上の基準が満たされない場合、直ちに接続料が不当であると判断することは適当ではなく、当該接続料を設定した事業者に対し、当該接続料が妥当であるにもかかわらずスタックテスト上の基準が満たされなかったことについて説明を求め、当該事業者から合理的な論拠が提示された場合には、当該接続料を妥当と判断するとされている。

2 検証結果

- 今回の検証においては、「フレッツ光ネクスト」・「ひかり電話」について、NTT東西に対して、それぞれ検証に必要な資料の提出を求めた。
- 検証方法としては、1)利用者料金が接続料を上回っているか否かについて、個々のサービスメニューごとに検証するとともに、2)利用者料金収入と接続料収入の差分(営業費相当分)が営業費の基準値(利用者料金収入の20%)を下回らないものであるか否かの検証は、営業費がサービスメニューごとに均等に生じるものでないことにかんがみ、サービスブランド※を単位として実施した。

※ 接続料設定事業者により同種のサービスとして位置づけられているサービスメニューの集合をいう。

○ 検証結果は以下のとおりである。

NTT東日本				
サービスブランド	サービスメニュー		1)利用者料金との比較	2)基準値の検証
フレッツ光ネクスト	ファミリータイプ		○	○
	ビジネスタイプ		○	
	マンションタイプ (1G-MC 使用)	プランミニ	○	
		プラン1	○	
		プラン2	○	
	マンションタイプ (GE-PON 使用)	プランミニ	○	
		プラン1	○	
プラン2		○		
ひかり電話			○	○

NTT西日本				
サービスブランド	サービスメニュー		1)利用者料金との比較	2)基準値の検証
フレッツ光ネクスト	ファミリータイプ		○	○
	ビジネスタイプ		○	
	マンションタイプ (1G-MC 使用)	プランミニ	○	
		プラン1	○	
		プラン2	○	
	マンションタイプ (GE-PON 使用)	プランミニ	○	
		プラン1	○	
プラン2		○		
ひかり電話			○	○

(注) ○:スタックテストの要件を満たしていると認められるもの、×:スタックテストの要件を満たしていないと認められるもの

(検証結果に対する総務省の考え方)

■ フレッツ光ネクスト

営業費相当分は基準値を上回っており、かつ、全てのサービスメニューにおいて、利用者料金が接続料を上回っており、接続料が不適正であるとは認められない。

■ ひかり電話

営業費相当分は基準値を上回っており、かつ、全てのサービスメニューにおいて、利用者料金が接続料を上回っており、接続料が不適正であるとは認められない

委員限り